

原爆症認定集団訴訟で「内部被曝」について証言を行ってきた琉球大学名誉教授の矢ヶ崎克馬さんがメールで内部被曝についてメッセージを発している。3月末に書かれた文章を許可を得て転載。

福島原発炉心溶融で多くの人が被曝しています。放射能におびえているだけでは被害が拡大するだけです。主権者である住民が「愚民」扱いされています。過酷な環境の中で、開きなおって、楽天的に、被害に対するこれからの手立てを考え、福島周辺だけでなく日本の社会をどう再建するか、この事故を教訓として新しい日本をどう「たたかいたるか」、知恵を集めるべきです。放射線被曝に対して最大防御を行いつつ、被害を受け身で受けるのではなく、被害の結果を先取りして認識しつつ、やるべきことは全部やり、要求すべきことは全て前もって要求するよくなファイティングスタンスを構築しようではありませんか！

我々は内部被曝隠蔽の歴史を学ぶ必要があります。

被爆者が内部被曝を隠べいされて苦しんできている事実を、事実として学びましょう。被爆者は原爆にやられ、その上、内部被曝を切り捨てた「被爆者認定基準」によって苦しめられました。被爆者は二重の苦しみを味わわされたのです。原爆症認定集団訴訟はその

ことをよく物語っています。第1次集団訴訟の全判決が内容的に内部被曝を認めて原告側が勝訴したことを再認識しましょう。そして今回の原発炉心溶融の事態に、内部被曝隠蔽の歴史を繰り返させてはなりません。内部被曝を否定された被爆者の苦しみを再現してはなりません。

文科省による汚染度の調査データはものすごい値を示しています。3月21日の測定結果は茨城ひたちなか市で最高値を示し、沃素とセシウム合わせて97000MBq (Mは百万)。これをキュリー数に直すと2.6Ci (1Ciは3.7掛けの10の10乗Bq)。何とチェルノブイリ事故時の炉心周辺の最高汚染度の10分の1程度の値になっています。この値はチェルノブイリ災害の時に日本に降った放射性物質の濃度は0.1Bq/m程度なので、その10万倍に相当します。福島のデータは無いが、汚染は広範囲に広がっています。政府はこの事実を数字だけ出して、国民に何の指示も出さないでいるのです。食品の汚染が報道されていますが、空気の汚染も、ものすごいものです。

積極的に事実を知らせないで、隠すことが何をもちたらずかわかっているのでしょうか？

「直ちに・・・」のまやかしの内に国民の被曝被害は拡大していきます。

汚染は放射性微粒子によって進みます。どのような姿で放出されているのか一切明らかにされていません。小さい酸化物数分子の形で放出されているのか？多原子からなる微粒子で放出されているのか？ここでは微粒子として放出されていることを仮定してどこまで飛ぶかを試算してみます。放射性微粒子は発電炉上空100mに吹き上げられて、毎秒4mの様な風に乗るといふ想定で計算すると、直径1μmくらいならば1500kmはゆうに運ばれます。風が強ければもっと遠くまで運ばれます。現実にはシミュレーションのように、放射能汚染の地域が拡大しています。チェルノブイリの時の日本の汚染状況よりはるかに高い汚染が進んでいるようです(小出裕章先生資料)。

スギ花粉の直径が30-40μmですが、放射能微粒子の直径はその10分の1以下のサイズです。普通のマスクでは防除が困難なサイズです。ずいぶん広範囲な地域の住民が内部被曝を受けざるを得ない

危機状態が進んでいます。私たちは汚染される覚悟が必要です。しかし、悲観して恐怖の内に汚染を待つのはよろしくありません。この怒りを胸にしっかりと収めて、開き直って、楽天的に、知恵を出し、最大防御を尽くしつつ、やるべきことはすべてやることしかありません。そして核のない新しい日本を創ることを決意するしかありません。

今、端的に言って、日本のどこにいても汚染は避けられません。汚染から精神的に逃げていけば、被災地救援や日常生活にも、「恐怖」は足かせになります。政府の「安全」、あるいは「直ちには健康に影響は無い」という不誠実極まりない「安全神話」に乗せられれば、しばらくしてから現れるとんでもない悲劇が待っています。

みなさん、開き直って楽天的になり、支え合って、最大防御を致しましょう。やるべきことは全部やって、危機を脱出しましょう。救援も生活もやるべきことは全部やって 切り抜けましょう。

正しい知識を獲得することが大切で、心構えは、「みんなが支え合う大きな利己主義」を持ちましょう。

テレビで流されているような、「汚染されたホウレンソウを一年分食べても平気です。」等という

# 放射性物質による内部被ばくへの対処 怒りを胸に、楽天性を保って 最大防御を



蛮勇は、無知であり人間を大切に  
する思想に欠けたものです。正し  
い知識を持ち、勇気を持って、賢  
く人間愛に基づく判断を致しま  
しょう。

ガンマ線発射の放射性放射体が  
測定されたら、その背後にはたく  
さんのアルファ線放射体やベータ  
線放射体と一緒にいます。政府発  
表は「X線検診の被曝量と比較し  
て・・・」と言いますが、医療では  
被曝させるけれども被曝する危険  
以上の医療的メリットがあるとい  
う目的を持った被曝です。それだ  
けに被曝限度も大きく設定されて  
いるものです。このようなメリッ  
トを伴う被曝と迷惑千万な受動被  
曝を比較すること自体が、まさに  
不遜な行為ではありませんか？

飛行機に乗った時の被曝といえ  
ば宇宙線による被曝です。日常受  
ける被曝には様々な原因がありま  
すが宇宙線がかなり寄与していま  
す。宇宙から飛んでくる放射線は  
透過力が高いものです。透過力が  
高いということは物質（身体）と  
の相互作用が少ないということだ  
す。放射線が身体を突き抜けると  
いうことは、突き抜けた放射線は  
相互作用しなかったということだ  
す。内部被曝する場合は相互作用  
の非常に強い放射線（アルファ線、  
ベータ線）にも被曝することにな

ります。比較する土台に共通性の  
ない比較です。このような発表を  
する人には、内部被曝の危険性を  
勉強してくださいと言いたいもの  
です。

がんになって亡くなるのは、  
1万人に一人くらいのものでしょ  
うか（これは多分非常に低く判断  
していると思います《肥田舜太郎  
先生のチェルノブイリ放射性降下  
物被曝時の乳がん死亡調査》？  
（それでも人口が1億人だと1万  
人！！）これらの方は病名が判  
明してもその原因は決して解明さ  
れることがありません。決して国  
家的に補償されることがない被害  
です。それだけに、原子力発電を  
やめさせることしか報いる方法が  
ありません。我々の根本的な責任  
です。閉じ込めることしか対応方  
法がない原子力発電は、本質的に  
未熟なテクノロジーなのです。

今は、みんな「貧乏くじは当た  
らない」と楽天的な願いを持ちま  
しょう。しかし、貧乏くじを引く  
ものは必ず出ます。それだけに必  
ず出る結果についての補償などを  
きちんと要求することです。それ  
はあくまで開き直らなくてはでき  
ません。あくまで楽天的に憲法の  
精神で、『個の尊厳』を守ること  
でやり遂げましょう。

今は楽天的に、悲観を先取りせ  
ず、悲劇の確率を最小限に食い止  
めることです。汚染が進む地域  
で「建物内退避」は危険の増幅で  
す。内部被曝を拡大します。政府  
は、住民避難領域を実態に合わせ  
て拡大・縮小すべきです。被曝弱  
者である乳幼児、妊婦、感染症罹  
患者等々の保護や避難をすぐ行う  
べきです。

汚染が深刻な場所で町を再建す  
る「ど根性」を発揮している多数  
の市民の皆さんがいます。土壌汚  
染等々に対するさまざま「郷土  
再建」にあらゆる知恵を出し合ひ  
ましょう。

汚染が確認されている地域だけ  
でなく、もっと広い範囲にいる人  
も放射能汚染の対応を致しましょ  
う。完全防護はできなくとも、部  
分的でも可能な限り防護すること  
です。

- ① マスクをしましょう。
- ② 帽子を被りましょう。肌をむき  
出しにせず、外套は埃の付きにく  
いものがベター良いでしょう。家  
に入るときはマスクをしたまま、  
埃を払い、それから家に入りま  
しょう。
- ③ 野菜等の食品はよく洗うこと  
です。流水で洗いましょ。お湯で  
ゆがけばもつと効果が上がります  
です。この判断は放射性微粒子が

表面にくっついていてただである  
と判断をしています。放射性物質  
を根から吸い上げて内部が汚染さ  
れている状態ではないと願ってい  
ますが、そうなったら廃棄しかあ  
りません。汚染されている水から  
放射性物質を取り除くことは一般  
家庭では難しいものです。  
防護のことは知恵を出し合って  
致しましょう。

政府は、この事態を客観的に把  
握し対処できる組織を確保し、体  
制をとること。政府は正しい認識  
を持つこと、迅速に正確な情報を  
提供すること、人間尊重の立場か  
ら対処すること。

政府が客観的な科学的な認識を  
確保しない限り、原子力発電推進  
派のまやかしの安全性吹聴は続け  
ます。  
私たちの声はそろえましょう。

【矢ヶ崎克馬】1943年、東京生まれ、  
長野県松本育ち。現在、琉球大学名誉  
教授。名古屋工業大学計測工学科卒、  
広島大学大学院理学研究科（博士課程）  
物性学専攻単位取得満期退学。理学博  
士（広島大学）。琉球大学理学部教授、  
日本学術会議物理学研究連絡委員会委  
員等を歴任。2009年3月、琉球大  
学定年退職。2003年より、原爆症  
認定集団訴訟で、「内部被曝」について  
証言を行う。著書『隠された被曝』（新  
日本出版社）など。